平成 25 年度会報第 3 号
平成 25 年 12 月 25 日

（公社）日本山岳会石川支部
支部長　中川　博人

今年の夏は天候が悪く、支部の年間行事もその影響を受けたのは残念でした。
秋の紅葉も去年ほどではないなと思っていましたが、紅葉の涸沢パノラマコースへ参加した方々には素晴らしい至福の味わいがあったようです。
会員・会友の皆様　どうか良いお年をお迎えください。

山行･行事報告

1. 紅葉の涸沢（涸沢～パノラマコース）

◆　日　程　　2013/10/5～10/6
◆　場　所　　涸　沢（テント泊）
◆　参加者　　CL.関本邦晴、埴崎　滋、大庭保夫、大庭太洋子
（　８名）　　安田二三男、國田弘子、山本瑠里子（関本知人）、池本順平

１０月５日　関本車（関本、安田、國田、山本）・大庭車（大庭夫妻、埴崎、池本）に乗り合わせ、飛騨清見 IC.より平湯へ　05:40 着。ジャンボタクシーにて上高地入りは、安上がりで快適。バス T. 06:20 着。明神～横尾経由で涸沢へと足を進める。往路 15km。

何時もながら上高地の風は清々しく、来る人の目的を問わず迎え入れてくれるが、やはりザックを肩にした登山者の表情からは、目的地への長い行程に立ち向かう緊張感と喜びを隠す事は出来ない。足を速める彼等も、河童橋の前では足を止め、目にする奥穂高・前穂・吊尾根や、左手に延びる西穂高岳の稜線に感動の色を濃くする。我々には歩きなれた道中も、同行する仲間によっては随分と楽しいものになる。今回のパーティには、上高地の生字引の埴崎さんや、何を聞いても即座に答えを返してくれる安田さんがいてくれて頼もしい。06:20　明神館までは８名隊列らしきまとまりで来たが、どうしても間が開く。リーダーとしては、遅れながらも一緒にと言う思いが有ったのだろうが、安田さんの提案で２班に分かれようと決定。先行隊４名（Ｓ、Ｏ.t、Ｉ、Ｙ.r）はテン場の良い場所取りを目指し足を速める。

白沢出合の橋の袂から、徳本峠分岐道を見る。H.23/8/6 島々～徳本峠越で上高地に入った道程を思い出す。S が言った「上高地に入るバス賃をケチルのに、随分と長い道を歩いたな・・」と。曲がりくねった梓川の流れ、ケショウヤナギが点在する河原から林の中へと軽快に足を運ぶ。S の引率でこれが４度目の山行と言う Y さん、実に達者な足をしている。前穂高北尾根が現れ帰路のルートを目で追う内に、ハルニレの木陰も気持ちの良い徳沢のキャンプ場に出る　08:10。徳沢園で一服するのは帰りの楽しみとし横尾へ。
左手に新村橋の吊橋が見えてくる。予定通りの下山路を辿ればこの橋を渡って徳沢に帰る事になる

のだが、前日の天気予報では曇り一時雨、悲観的な思いを振り払い、屏風岩の岩壁が現れ、トイレ待ちの長蛇の列が見えると横尾だ。横尾大橋の袂で軽い朝食を取る。
横尾　09:10～09:30 発。本谷橋通過、多くの登山者が河原で腰を落としているのを目にも留めず足を進める。ダケカンバの中を進み、風穴の冷気に顔を突っ込む。快適に進んでいた足もチョット一服気味に、ここまで来ると前後を行ったり来たりしていた登山者たちとも声を掛け合うようになる。少し前の山には見られなかった景色、カラフルな山ガールの一団と、彼女たちに引かれるように付いてゆく若き男達。
屏風岩の裾を左に回り込み高度を上げると、前方に前穂の峰が見えてくる。沢に沿って続くナナカマドやカエデの目にも鮮やかな紅葉に感嘆の声が。この景色は涸沢が近づくにつれ更に彩りが深まり、錦秋の山並みにテンションが上がる。
モレーンの上に涸沢ヒュッテが見える。石畳にかかるとモレーン下の分岐に出る。左に回るとヒュッテ、右に行くとテン場。I はビールの香りに引かれ迷わずヒュッテへ、ザックも下ろさず売店にビール大と声を掛ける　　12:30。
思ったよりテントが混んでいない、天気予報のせいで敬遠したのかな？全員集合 15:30。
揃ったところで４人張と２人用２張を好立地に設営でき　16:30 より楽しき交流が続く。
前日リーダーに“嗜好品は・・”と聞くと、“持たない、欲しければ自分の分だけ持ってこい・・”いざ食事となると、出るわ出るはおもむろに取りだしてくる。Ｙｆ.さんは地元の高級「丸芋焼酎」こいつは美味い。O さんは自分は飲まないのに、ウイスキーを忍ばせて来た。親ごころの有難さに感謝。　18:00 お開きとしテントに入り、又話がはずむ・・。
　１０月６日　寝静まった 01:30 頃、ガサゴソと起きだして小用に。前夜“この調子だったら明日は晴れそうだな”の話が当たり、満天の星空が広がる。しばし寒さも忘れ、大の字になってこの場所にいる事の喜びに浸る。04:00 起床“誰かのせいで寝不足だ・・”“俺は　キリギリスの合唱がにぎやかで寝不足だ・・”“そんな音聞こえんかった？”これ又楽しき仲間の語らいに、顔を見合わせ思わずニヤリ。日の出とともに穂高の峰々をモルゲンロートの黄金の輝きが染めてゆく。しばし声も無く眺め入る・・！
　05:00～06:30　朝食後テント片付け、予定どうりにパノラマコースへと　復路　14km。
07:00　涸沢を後に、チョットきついが穂高を望むロケーションとしてこれ以上のコースは
無いと思う。岩場を何ヶ所も通る狭く険しい道、頼りないロープに繋がり、落石の危険が有るルンゼは休まず進む。足場の良い所で振り返ってみる、ヒュッテの背後に涸沢カール、扇形に広がる雄大な北穂沢、穂高連峰の勇姿は何度目にしても日本離れした眺めだ。
前に進む、屏風岩の左手奥に初めて槍の穂が見えた。期せずして“槍だ、槍だ”。
屏風のコルに出る　08:30。屏風の耳下大岩の上に腰を下ろす。吊尾根の左手に前穂高と北尾根の岩峰が連なる。こうして見るとやはりすごい迫力だ“俺はあそこをこう登りたかった、でも往ったら死んでいたな・・”奥穂高から北穂高、右奥に槍ヶ岳。かって歩いた道筋を目で辿り、熱く話がはずむ。堪能した展望を目に焼き付け、分岐を立つ 09:00。
後は一路徳沢へと、足の疲れが出て来たかどうしても間が開く。下山は時間が掛かっても一緒にとの思いでひたすら下る。途中で登って来た同年輩と思しきご夫婦？に O さん声をかけ“この道を登りに使うとは、お強いですね”“田部井淳子さんが、これを登って涸沢へ行ったと話していたので私たちも・・”。　奥又白谷河原に出る、マーキングに従って進む。
沢筋を下っていくと、最近吹き荒れた台風の爪痕か、人為的に刈り掃ったのかすごい量の倒木が針

葉樹林の道筋に積まれている。井上　靖「氷壁」のモデルの慰霊碑脇で一休み、後続を待つ。全員揃ったところで梓川右岸林道を進み新村橋に出る。橋を渡り「徳沢」へ“プッハ―”ジョッキーで一杯喉を潤す。美味い、人心地がついた。
とにかく天気に恵まれた山行に感謝しつつ、あの涸沢の感動をもっと多くの仲間たちと味わいたかったという思いが頭をよぎった。
　技量、気力はだれしもが認める皆様、しかし抗いがたい年波に、体力・体調の管理で二の足を踏む人が意外と多いのでは、時間を懸ければ行けるという方が。これからの山行企画にはこういった事も加味し、ゆとり組と健脚組といった少ない参加者でも２コース編成の計画を、サポートのメンバー編成を含めた立案を持って呼びかける企画を考えられないものでしょうか。

（文・写真　池本順平）

２．（公益活動）自然観察会・秋山紅葉山行

◆　日　程　　１１月９日(土)
◆　場　所　　火燈山（８０３ｍ）～小倉谷山（９１０，６ｍ）
◆　参加者　　（一般）　石黒秀一、坂井久泰、西中博
　　（会員）　長清幸子（CL）埴崎滋、東野智也。

　山中・丸岡トンネル手前から旧国道に入る。大峠には廃村（昭和５８年）の記念碑が谷本知事の碑文で小学校跡の台地に建っている。トイレと駐車場のある広場で、長清会員がコースの説明を行い、９時２０分出発。まもなくして、白山神社脇の旧国道と分かれ左の尾根に取りつく。　急坂の要所にはロープが張られており、尾根筋の登路を行く。南側斜面は常緑樹林、北側は里人の薪炭や生活具採取の二次林とみられる落葉樹林が際立っている。伐採が行き届いた登路が続く。　７３９ｍの平坦地に着くが、７～８人は優に座れる。
火燈古道の保全に執念をもって取り組まれている大庭会員夫妻はこの日も従事しておられる。
　途次の観察ポイントは（ブナ科）のコナラ・ミズナラとスダジイ等の堅果の違い。（モチノ

キ科）のアカミノイヌツゲ・ソヨゴの赤い果実、冬芽が鷹の爪の形から和名となった（ウコギ科）のタカノツメ。春の山菜の王様コシアブラの扁球形の黒の果実。（クスノキ科）のクロモジは小枝を折ると芳香を発し、爪楊枝の材となること。（モクレン科）のタムシバの柔らかな冬芽等、長清会員の細やかな解説が続く。
シャクナゲが登路の両側に目立つようになり、季節外れのピンクの花をつける株にも出会う。
火燈山山頂は１１時半着、福井の女性二人（大庭氏の知己）や４・５人の先客・通過客があり、人気のほどが窺がえる。昼食後、小倉谷山を目指す。　登路は尾根を忠実にたどる快適な道で、山頂手前ではブナの純林が開け、新緑の頃の爽快さに思いを馳せる。小春日和の山頂からは、伏拝みの往時を偲ばせる御前峰から三の峰の白山景観が開け、今シーズン何度目かの冠雪のピークが陽光に映えていた。西側は広大な坂井平野を蛇行する九頭竜川と北方湖方向の風力発電の鉄塔が際立って見下ろせる。　個人的な感想としては、ウルシ・カエデ・モミジ科の紅葉がこの時季にしては、少し鮮やかさが淡い印象だ。
帰路は、２時に火燈山発、大内登山口には、３時半に帰着。　（文：埴崎滋）

3.　5支部合同懇親山行（京都・滋賀支部）

～湖南アルプス　金勝山(ｺﾝｾﾞﾔﾏ)を歩く～

◆日程　　平成 25 年 11 月１６日（土）～17 日
◆場所　　アーブしが　湖南アルプス金勝山（ｺﾝｾﾞﾔﾏ）（竜王山６０４.７m）滋賀県栗東市
◆参加者（８名）　太田義一　織田伸治　津田文夫　中川博人　埴崎滋　廣瀬正　前川陽　村上　哲

１１月１６～１７日両日に亘り京都滋賀支部主催の懇親会が琵琶湖・瀬田の唐橋畔「青年会館」にて開催された。当支部から２台の車両（織田車・津田車）に分乗し、８名が参加。
午後３時からの受付を済ませ、４時から「比良山系の自然と遭難の現状」と題して松下征文氏（京都滋賀支部副支部長）のｽﾗｲﾄﾞを交えた講演を聴く。全員熱心に聴き入り、講演後の質問も活発に飛び交った結果時間切れで「続きは懇親会の席で」ということで閉演。
続いて午後６時半からの懇親会は各支部から寄せられた「銘酒」がｽﾞﾗﾘ床の間を飾り、各支部長の挨拶もそこそこに宴ははや佳境に。座は各支部会員入り混じっての和やか雰囲気の内に、来年の富山での開催を約しておひらきとなった。
翌１７日は曇り空だが雨の心配はない。瀬田川の畔には早朝からﾏﾗｿﾝ人が駆け巡り、川面ではﾎﾞｰﾄ漕ぎの練習に息を弾ませる風景も。
朝食後それぞれの車に分乗し、登山口の上桐生・園地へ。私は２年前元旦に干支登山・竜王山を目指して訪れたことがある。ｺｰｽはその時と逆ｺｰｽで沢添いに落ｹ滝を経て、鶏冠山との分岐で尾根へと出る。そういえば鶏冠山も「酉年」に登っている。滋賀には干支の名のつく山が多い。都を中心に仏教が広まったことによるものか・・。この辺りから巨岩・奇岩の岩峰が連続する。山全体は花崗岩があちこちに白く露出し、遠くから見ると雪を戴いた山々に見えることから「金勝(ｺﾝｾﾞ)アルプス」と呼ばれているようだ。天狗岩の下で昼食となり、元気組はそそり立つ岩峰へと登り、湖南の山々、琵琶湖、湖東への展望を欲しい儘にしたようだ。

耳岩から階段の山道を白石峰へと達する。重ね岩・国見岩を経て谷筋に入ると薄暗い林となる。やがて狛坂(こまさか)磨崖仏に至る。この辺りはまさに中世仏教ﾛﾏﾝが色濃く漂い、かつて存在しただろう伽藍を彷彿させる石積みにしばし足を留め、ﾃﾞｼﾞｶﾒの撮影会となる。

南谷林道を下り新名神高速道の下を抜け、さかさ観音、ｵﾗﾝﾀﾞ堰堤を経て上桐生へと帰り着く。さかさ観音の横を流れる川筋で見た紅葉の赤が陽に染まり何とも美しく印象的だった。「秋の夕日に照る山もみじ・・・」口ずさむ女性会員に癒された秋の山行でした。

（文：村上哲　写真：前川陽）

4. 石川支部 山祭り

◆日　程　　平成 25 年 11 月 29 日（金）～30 日（土）
◆場　所　　粟津温泉「おびし荘」
◆参加者（17 名）　織田伸治（幹事）　太田義一　大幡裕　大庭保夫　大庭太洋子　小畑聡子
関本邦晴　高田和彦　樽矢導章　塚谷義昭　内藤千代　長清幸子　埴崎滋
廣瀬正　廣瀬幸寛　前川陽　村上哲　（男 13 名　女 4 名））

11 月 29 日　粟津温泉おびし荘にて、山祭りが開催されました。天気予報では雪になっていましたが、雨で道中も心配ありませんでした。
宴会場はこじんまりとした和室で、ぐるりとお膳が並べられ、皆さんのお顔を見ながらご馳走をいただきました。刺身から始まり、蟹をむしり、豆乳鍋であたたまり、魚のあら煮、茶碗蒸し、にしんそば、釜飯他美味しいものに囲まれ、大変満たされました。久しぶりにお会いした方、初めてお会いした方ともお話ができました。山の歩き方に皆さん個性があり、お話が聞けてとても楽しかったです。
1 次会お開きの後、2 次会は 1 室お借りして、お酒、おつまみ、果物が振舞われ、飲む人、語る人、眠る人それぞれ自由に過ごされました。
この自由さがいつもいいなあと思います。

温泉にも入ってきました。大浴場も貸切状態で、ゆっくりのんびり出来ました。お世話してくださった方々、ありがとうございました。また、参加させてください。

（文：小畑聡子　写真；前川陽）

5.支部長会議・年次晩餐会の報告

◆支部長会議　平成 25 年 12 月7日　午前 10 時 30 分より

◆会　場　　品川プリンスホテルアネックスタワー5F 「大雪」

全国支部長が一堂に会す。冒頭、森　武昭会長から現在日本山岳会の活性化を図るうえでの最重要課題は、「会員増強と次期リーダーの育成」であり、本日はこのことを協議していただきたいとの挨拶から始まった。

会務報告は以下の通り報告があった。

① 110 周年記念事業（案）
　2年後JACは創立 110 周年を迎える。尾上前会長を委員長として4回の実行委員会を開催。
　コンセプトを「若手会員の育成及び会員の増強と各支部の活性化を図る」 とする。

② 「山の日」制定：経過報告。超党派議員連盟で8月11日を国民の祝日「山の日」として次期通常国会に祝日法改正案を提出する。個人会員を募集。

③ 家族登山普及WGについて：来年度も各支部にお願いしたい。

④ 300 名山編纂について：現状36％（109 山）の提出があった。

⑤ 日山協、・都岳連関連：公益法人移行に伴い、今年度末を以て加盟していた都岳連を退会する。

⑥ 税額控除制度について

⑦ 旅費等の自己負担額を日本山岳会へ寄付する場合の取り扱いについて

⑧ YOUTH CLUB 活動について

第2案件として、支部活性化についての意見交換。

北海道支部・東京多摩支部・東海支部・関西支部・広島支部・四国支部よりそれぞれ活性化に向けての活動状況の説明があった。

① 北海道支部＞雪崩講習会に指導者7名。3ブロックで実施。これが岩や沢へ波及しており、リーダー育成が進んでいる。

② 東京多摩支部＞都県分県嶺踏査。公募延 510 人。11 人が入会した。初心者登山教室。3ヶ月で座学3回、登山3回。年齢制限50歳以下。

③ 東海支部＞4年 7 か月で 139 名入会した。東海学生山岳連盟の育成。（現在 15 大学、延 100 名が加盟。

青年部：東海学生山岳連盟から正会員に。精鋭的な登山実践の若手グループ。山ガール講座の開設。20名限定の講座。向上心が高く、有望。

④　関西支部＞ゆるやか山行（里山歩き中心）月1回。会員外の参加あり。人気がある。
登山教室（初級・中級・上級）で開催。段階を踏みつつ、会員誘致している。

④　広島支部＞中国新聞ブンカセンターの登山講座中級講座卒業生を正会員に推薦。正会員163名中80名が卒業生である。

⑤　四国支部＞登山教室（毎月1回）

―総括―

（宮崎紘一担当理事）　全体的に登山教室・講習会等が共通している。山岳会の人材の多さは財産と考える。内部的には YOUSUCLUB 等の次期リーダー講習等も活用してほしい。

（黒川　恵副会長）　登山教室の実施については、講習スタンダードの作成も必要か。

以上。

◆平成 25 年度年次晩餐会　12 月7日（土）　午後6時より

◆会　場　　品川プリンスホテルアネックスタワー5F

◆参加者　津田文夫、太田義一、北栄一郎、廣瀬正、中川博人（会員4名、会友1名）

晩餐会に先だっての講演会では、2012 年 5 月にダウラギリを登頂し日本人初の 8000m14座を完登した竹内岳洋氏の講演会があり、映像を交えた話に感動した。今年の晩餐会は全国から 466 名の会員が参加。皇太子殿下も出席され楽しいひと時であった。太田・廣瀬の両氏は翌日の記念山行にも参加した。

その報告を巻末に掲載します。

（文　中川博人）

今後の行事予定

**参加希望者は、申込期日までに担当者もしくは事務局（前川：080-1952-7298
メール：maekawayo@gmail.com）まで申し込みください。**

1. 平成 25 年度支部事務局会担当者議

- 日時　平成２６年１月２５日（土）～２６日
- 場所　（２５日）日本山岳会会議室　（２６日）プラザエフ会議室
- 議題　①会長挨拶　②会務報告　③支部会計処理の手引き（改訂版）　④支部２６年度事業計画・予算　⑤支部活性化活動　⑥支部からの提案等　⑦第３０回全国支部懇談会（埼玉支部）　⑧その他

2. 雪 洞 山 行

１年の計画行事で最も厳しい時期の山行ですが、その分、収穫も大です。正月でなまった体をほぐし、個人山行等の危険回避訓練と天候不良に悩まされた夏季事業の“脱”不完全燃焼のため、是非ご参加ください。

◆日　程　平成 26 年 2 月 15 日（土）～16 日（日）

◆場　所　「西山付近の眺望の良いところ」（場所は積雪状態によって変更あり）

◆集合場所と行動予定

・2 月 15 日（土）８時 00 分　道の駅「瀬女」駐車場

乗合いで登山口まで移動、昼食後、登山開始

13 時頃から雪洞を掘り始める、完成後夕食、就寝

・2 月 16 日（日）　朝食後、付近散策（天候次第）

◆持ち物　夕食、朝食は各自・冬山装備一式・（輪環・スノーシュー・山スキーの何れか、オーバーミトン、ゴム手袋は有効）・（スコップ・スノーソーがあれば持ってきて下さい）小さいブルーシートがあれば便利です。

◆申し込み

参加者は**２月７日（金）**までに**関本**まで、メールで連絡下さい。

参加者には、詳細を追って連絡します。

連絡先　e-mail kuniharu@dog.email.ne.jp

携帯電話　０９０－４６８２－３１７２

3. 春山　カンジキ山行

◆日　時　　平成２６年３月１５日（土）　予備１６（日）

◆場　所　　大倉山（1,443m）～土倉山（どくら　1,384m）　早月川右岸の山

◆集合場所　金沢山側環状線観法寺パーキングエリア

午前 4 時集合　乗り合わせで 4 時１０分出発

早月川剣橋先の桑首谷林道入口に駐車

（車が複数台なら下山口の鍋増谷林道にも配車）

◆コース

369m 桑首谷林道 6:40 歩き出し⇒635 大倉山登山口 7:40(出来るだけ夏道どおりに登る)

⇒1,054m 桑首尾根 9:30m⇒1,443m 大倉山 11:30m

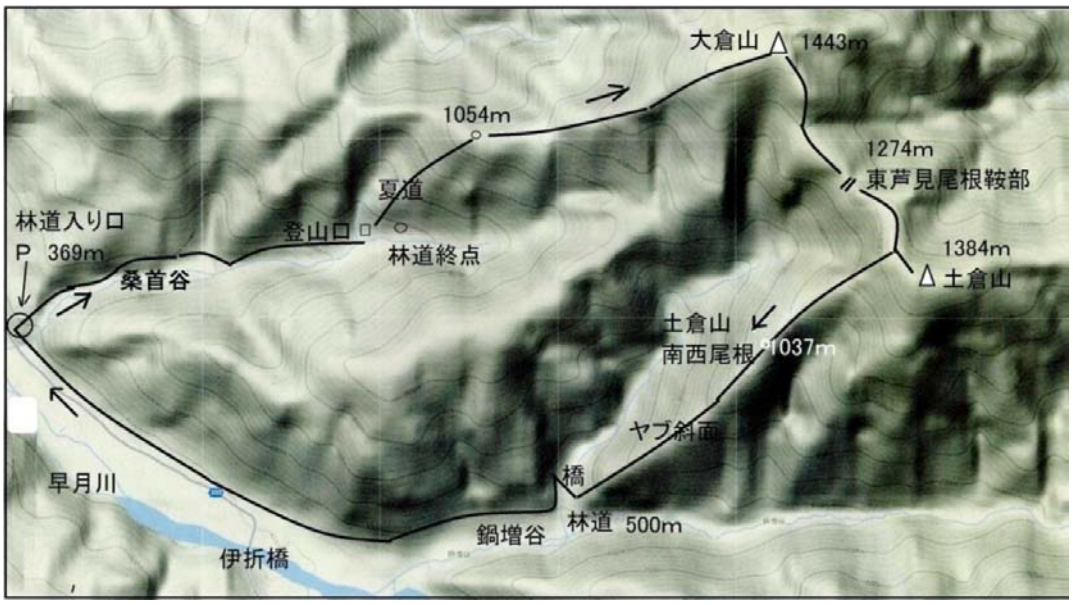
⇒1,420m 東芦見尾根（劔岳展望地）で昼食 12:00 ～12：30 発

⇒1,274m 東芦見尾根鞍部 13:00m⇒1,360m 土倉山南西尾根分岐 13:30

⇒1,384m 土倉山 13:40m⇒土倉山南西尾根分岐 13:50⇒1,037m 南西尾根中間点 14:30

⇒500m 鍋増谷林道 15:20m⇒桑首谷林道入口（車）16:00

<エスケープ> 天候、残雪状態が悪い場合は同じ桑首尾根で戻る。



◆ 個人装備　春雪山日帰りの服装、アイゼン、ピッケル、かんじき、ストック、雨具、サングラス、地図、コンパス、医薬品、朝・昼食、非常食、水、(カメラ・携帯 Tel)

◆ 団体装備　ツェルト、ガスコンロ（４人に１セット）、ＧＰＳ１台、携帯１台、補助ロープ 30M

◆申込み　**３月７日までに、に事務局**（前川：080-1952-7298　Mail：maekawayo@gmail.com）までお申し込みください。なお、非会員・会友の参加は山岳保険加入者に限ります。

◆その他　集合場所の、金沢山側環状線観法寺パーキングエリアは、金沢方面からは森本トンネルを抜けてまもなく、反対車線側にありますが、右折禁止のため、一旦高架から降りて、折りしが必要です。折り返し場所はトンネルを抜けてすぐに、続けて 2 箇所あり、2 箇所目の方が便利ですが、1 箇所目からすぐにあるので、行き過ぎないように注意願います。

おしらせ

1. 新版「日本三百名山登山ガイド」石川支部執筆担当分（６山）の完了について

新版「日本三百名山登山ガイド」(全3巻)の発行事業につきましては本部企画事業として、平成 13 年 1 月末に各支部に執筆依頼があり、平成25年2月 18 日の支部役員会議にて、執筆責任者を選定し、平成25年度支部総会において執筆補助・取材協力者を募る等、鋭意進めてまいりました。

12月13日、編集社の(有)奥多摩館より、石川支部担当の秋季取材分が無事到着し、先の春～夏季取材報告分と併せ計6山全ての原稿が、〆切内に無事到着したことに対するお礼の電話があり、完了しました。

担当者の皆様には、原稿等作成に際しては、下調べから、現地調査、写真撮影等、大変お疲れ様でした。

なお、今回の執筆責任者は以下のとおりです。

1.医王山（埴崎滋）・大門山（長清幸子） 2.大笠山（石森長博） 3.笈ケ岳(八十嶋仁) 4.三方岩岳（前川陽）
5.白山（西嶋錬太郎）

＊ 中川支部長には笈ケ岳の取材協力・原稿アドバイスを、また八十嶋会員には担当以外にも医王山、大門山の写真取材協力をいただきました。

＊執筆者各位には、今後編集の段階で、問い合わせがあった場合には、引き続きよろしくお願いします。

2. 会友の入会について

関本さんのご紹介で、12月から以下の２名の方が、会友になられましたのでよろしくお願いします。

・岩崎　美那子さん （S22 生　A　型　七尾市在住）
・山本　留理子さん （S46 生　B 型　小松市在住）

3. 第１回全国安全登山実技指導 冬山・雪崩対策講習会

９月に実施された安全登山普及（クライミング技術向上）講習会の一環として、以下のとおり会員１名を本部 YOUTH 講習会に派遣します。

- 主催者　公益社団法人　日本山岳会
- 講習会名　第１回全国安全登山実技講習会（冬山・雪崩対策講習）
- 日程　平成 26 年 1 月 25 日（土）～26 日（日）
- 場所　国立登山研修所　劔沢夏山前進基地
- 派遣会員　八十嶋　仁
- 講習の概要

演習地まで深い雪の中をハイクアップ。途中、地形の確認、危険地帯の横断方法等演習。
ピットチェックの説明、雪崩捜索演習。埋没者の掘り出し(V 字コンベアーメソッド)。
掘り出した遭難者の搬出（ヒューマンチェーン、ツエルトでの引き出し）。
雪崩捜索演習（ゾンディーレン）。雪洞構築、懸垂下降演習。

4. その他、お願い

◆H25 年度個人山行・ボランティア活動の報告について

メールもしくは郵送等で事務局（前川）まで報告願います。郵送の方には別途切手を返送します。

記入例として、個人山行は「10/１～3　黒部五郎岳　中川　岡本」　ボランティア活動（登山支援・自然保護等関連）では、「６/７　山岳講演会　〇〇大学　田中」等と記載願います。

◆次年度登山希望の山名等の募集について

来年度事業計画で登山希望される山があれば、事務局までお申し出願います。

平成２５年度　年次晩餐会記念懇親山行「高麗山･湘南平」の記

JAC6756.　太　田　義　一

今年の年次晩餐会の記念山行は、神奈川県平塚市と中郡大磯町にまたがる大磯丘陵（高麗山・湘南平）に登ることになった。この丘陵はＪＲ東海道本線の大磯駅の北にある東天照(130m)･高麗山(168m)･八俵山(159m)・浅間山(181.28m)・湘南平（179m)と続き、浅間山(せんげんやま）には一等三角点の本点がある。高麗山と呼んでいるのは、どうもこれらの一連の山塊をひっくるめた総称のものらしい。私たち山屋の感覚からすると、なぜこんな小さな丘陵のコブを並べたような山塊を小間切りにして名前を付けなくてはならないのか不思議な気がする。全山が鬱蒼とした臨海性常緑林で覆われている。中には樹齢３～４百年の古木もあって、湘南に残された唯一の自然林で県は「高麗山県民の森」に指定している。晴れた日にはこの山の稜線からは三浦半島、房総半島、湘南海岸、伊豆大島、丹沢連峰から富士山や箱根までも一望できる。湘南の山は、渡来民族の歴史を秘め、歌川広重の『東海道五十三次』の浮世絵では平塚宿の山として知られる高麗山が人気がある。山頂付近には大堂・高麗権現の堂宇があったが今は荒廃して礎石を残すのみで、山頂への急な石段も所々傾き苔に覆われてしまっている。山麓の神社は明治の半ばまで高麗神社と呼ばれ崇められていた。高麗を「コウライ」と読ませ、コウライを「高来」と書いて「タカク」と呼ばせて現在の社名としている。その後、日本の朝鮮支配のもとで高麗神社が高来神社と改名された。それには外来の神（朝鮮の神様）を疎外したことによるものと考えられる。ここにも不幸な日朝間の交渉史を見ることができる。

※左の丸い山が高麗山。その右手に白い富士山が描かれている。

昔から日本と朝鮮の文化交流は深く、相模国をはじめ東国七州の高麗人を武蔵国に移して高麗郡を置いたと『続日本書記』に書かれている。奈良時代の頃、唐、新羅に滅ぼされ祖国を追われた朝鮮民族・高句麗(kokuri)の王族のひとり、高麗王若光(Komanokokishijakuko）は一族を連れて、高度の文化を携えて日本海を渡り神奈川県大磯に上陸し、この山の麓の化粧坂あたりに住み、日本に帰化してこの地を足掛かりに箱根や伊豆を開発して行ったと伝えられる。渡来した古代高句麗の一族が相模湾から上陸する際に、花水川(はなみず)金目川(かなめ)とともに目標になった山がこの高麗山だと云われている。このことは、高来神社の例祭の「船祭」で舟子たちの祝い歌の一節に「われらは日本の者にあらず、諸越（もろこし）の高麗国の守護なるが……」と歌われたり、箱根神社の『箱根権現縁起絵巻』には「国をいでて関東相模に大磯というところに着かせ給ふ」とあることからも理解できよう。大磯には明治以降、伊藤博文や吉田茂など政財界の名士や、新村襄や島崎藤村などの文化人も多く住んだ地としても知られている。

午前９時にＪＲ品川駅港南口(東口)の品川イーストワンタワー前からチャーターしたバス２台に90人が分乗して、東名高速道･小田原厚木道路経由して大磯に向かう大磯着(10:30)。大磯の街中から駅前を通る国道１号線を歩き、高来神社口の交差点を左折して高来神社に着く(10:35）。この辺り今はすっかり人気になった正月の箱根駅伝のコースになっていて、この大磯駅前は第３中継点になっている。高麗山への登山口は神社社殿裏で全員で記念撮影後、三々五々出発する(10:50）。

左は急坂の男坂、右は比較的緩やかな女坂である。照葉樹林の中の女坂をゆっくり登って行くと、突然山頂直下で急坂になり左から男坂が交わり石段を登り切ると小広場に出る。以前、大堂と呼ぶ御堂（上宮）のあった高麗山の山頂である(11:15)。標高167.3m。大磯の街の喧騒が聞こえるが樹林に覆われていて展望が効かない。小さい祠のある高麗山を巻いて裏手に進むとハイキング道が続いている。この道は「関東ふれあいの道」に指定されていて市民に親しまれている。今日もこども連れのハイカーで賑わっていた。

花水橋から見た春の高麗山

樹木はマツ、スギ、ケヤキ、アカシデ、コナラ、クリ、クヌギ、エノキ、キブシ、サクラ(ソメイヨシノ?)、エゴノキ、ヤブツバキ、モッコク、シキミ、ヒサカキ、マサキ、シラガシ、スダジイ、アラガシ、マテバシイ、ウラジロガシ、タブノキ、クスノキ、サカキ、ヤマザクラ、コムラサキ、ヤマツツジ、クサギ、ネズミモチ、ヤブムラサキ、アオキ、ハコネウツギ、ヤマグワ、ハリギリ、イロハモミジ、ハゼノキ、ヤマウルシ、フジなどが眼につく、その中で特に眼を引くのはアオキだ。アオキは身近な雑木林にごく普通に生える木だが太平洋側のものは葉は大型で鋸歯縁（ギザギザ）の切り込みが大きく鋭いのに比べ、日本海側のものは葉は小形で背丈が低い変種で、葉のギザギザも全縁に近い切れ込みである。また北陸にはクロモジがないと力説する人が居るものだからオオバクロモジとどう違うのか確かめたかったが残念ながら見当らなかった。林床にはオオバノイノモトソウ、クジャクシダ、キジノオシダ、ジュウモンジシダ、ヘビノネゴザ、シシガシラ、ワラビ、ゼンマイなどシダ類が多い。私の不得手な分野であまりわからない。以外に思ったのは、今、花盛りのツワブキの花があんなに美しいと感じたの初めてだった。またこの山にはヒガンバナが自生しているようで「彼岸花群生地」の立札も眼にした。他の植物は枯れてしまって見ることが出来なかったが、ただひとつ浅間山の三角点の傍にノアザミだけが三株、色濃く咲いていたのが印象的だった。自然観察会ではないが素晴らしい自然学習の素材がそこかしこに満ち溢れています。私たち北陸から出掛て行くと、何げなく見ている植物でも何か変わっているのが分かります。北陸、特に石川県は「日本列島ここが真ン中」ですから、南限・北限の植物が混在しています。また雪の降る所と降らない所、積雪の有無にも関係し、長い年月の流れの結果、本店と出張所とでは少し形態の変化した変種、亜種、別種にまで変化した植物があったりする一方で、生まれてから今だに同じ種のまゝ、同じ形態のまま留まっているものもあり、背景の自然史にまでも首をつっ込んでしまいます。自然観察では『五感を働かせて周囲を見回してください』といわれます。つまり目で見て、耳で聞いて、鼻で匂いを嗅いで、手で触って、時には口や舌で味わって見る。これだけでは見落とすことがある。そこで必要になってくるのは第六感を働かせることである。予感に繋がる「何かに見える」想像力で子供の頃は何を見ても新鮮で面白く感じた。しかし成長するに従い面白くなくなり想像力を働かせる事が少なくなる。ほんの少し鈍った感覚を研ぎ澄ませると森には様々な発見と驚きが隠されています。第六感を働かせる事で自然観察の楽しみがどんどん広がって行きます。

明るい草原のような平を右に入ると山頂に石造りの祠に並んで木枠で土留めを施した三角点がある。浅間山（せんげんやま）の一等三角点本点で標高181.28mで神奈川県内に８つある一等三角点の一つで明治16年11月に埋没され大正13年８月に標石面取りが行われている。この三角点は房総半

島の鹿野山や丹沢山などと結んで三角点網を作っている。本来なら最高の展望の得られる所だが海岸方面は樹木が繁っており展望を悪くしている。北緯35° 19′ 19″ .6585、 東経139° 18′ 44″ .4317。行く手の林の中に西湘南地方をカバーする大きなテレビアンテナの基部が見え湘南平はすぐそこである。再び急な坂を下って登り返すと湘南平に出る。千畳敷と呼ばれる広い平坦地に登ったすぐ上に神奈川テレビとＮＨＫ共有のテレビ塔が建っている。高さ70m程の平に建つレストハウスに展望台があり、金網越しではあるがここからの展望は素晴らしい。湘南平は平塚市と大磯町の境にある丘陵で高麗山（こまやま）と泡垂山（あわたれやま）の山頂一帯を指す。かつては千畳敷と呼んでいたが公園整備に伴い湘南平とした。「神奈川県の公園100選」選ばれている。平には俳人萩原井泉水の句碑や山岳家岡野金次郎の顕彰碑がある。湘南平からは三浦半島・江の島・房総半島・伊豆半島・大島・横浜市街・箱根、晴れていると富士山・丹沢山塊等が見渡せる。30分間(12:40~13:10)の昼食・休憩。食後、この湘南平の一角にある岡野金次郎の記念碑の前に集まり講話を聴く。

まづ岡野金次郎の碑が建立された経緯について……。平塚市議会に文化祭の事業として湘南平に碑を建てる議案が出された。同所には曽我兄弟の足跡があり曽我兄弟の碑を建てる事に決まった。これに斎藤昌三氏が反論「親の敵討ちと言うのは現代の思想にはない。平塚に住んでいて交通事故により死亡された岡野金次郎と云う、日本のスポーツ登山に貢献した人がいた。文化祭の記念事業としてなら岡野氏の像を建てることが相応しい」と述べ、この意見が採用される事になった。

記念碑には

山を愛し　山を楽しみ
晩年平塚に住み　平塚で終った
日本山岳界に於ける先駆者
　岡野金次郎翁を偲ぶ
　　平塚市長

壮年時代の岡野金次郎

岡野金次郎は明治７年４月15日、現在の横浜市で生まれた。(1874~1955)昭和33年没・84歳。後に日本山岳会初代会長となる小島烏水とは明治27年の徴兵検査で出会った。烏水は明治６年12月29日生まれ(1873~1948)で岡野とは４ヶ月しか離れていない。 徴兵検査の折には烏水は背丈は高かったが非常に痩せていて丙種。岡野は背丈が低くて身長不足で乙種となり、２人は共に不合格になった。それが縁となって初対面の挨拶から意気投合し、両人はフンドシ姿で語り合った。その時以来親交があると云うから文字通り裸の付き合いから始まった。２人は日曜日ごとにまだ五十三次の面影の残る東海道や武蔵と相模国境の丘陵地帯を歩き廻る様になった。烏水は四国高松生まれ。本名は小島久太。頼山陽の本から父が命名した。横浜商業高卒。明治27年横浜正金銀行勤務のかたわら明治30年代には『文庫』の記者として活躍、文芸批評家、山岳紀行文家として地歩を築いた。
烏水と云う名は明治29年11月、樋口一葉を取材し「一葉女史」を著す。著書は大変好評で≪本誌空前の大批評蓋文壇近時の雄編≫と表紙にうたわれて、批評家としての筆力が認められ『文庫』の記

者に推挙された。記者として誌友の投稿を選択し批評をする事となると、本名の“久太”では格好がつかない。文人の袴となる雅号を持たなくてはならない。そこで日頃から友情と敬愛の念をもち続けていた滝沢秋暁（彦太郎）に相談した処、≪烏の真似する烏水に溺る。≫から“烏水”と名付けたらどうだと云われた。本名の“久太”を好まずペンネームの烏水で通した。烏水と岡野の２人が３千米の高山の素晴らしさに搏たれたのは明治33年10月乗鞍岳登山の折であった。高山から平湯峠に辿りつき、案内に平湯の百姓を雇って平湯峠から霧の乗鞍岳の頂上に立った。その時、突然霧が晴れて鋭い岩峰が現われた。案内人に聞くと槍ヶ岳だという。２人の槍ヶ岳登山計画はこの時決まった。烏水と岡野は明治35年８月槍ヶ岳に登る。初登頂と思っていたがウエストンの『日本アルプスの登山と探検』を見て驚いた。自分たちより前にウエストンが登っていたのだ。これを発見した岡野金次郎は驚きのあまりおっとり刀で烏水の所へ注進に及んだと云う話は有名だ。岡野が横浜のウエストンの自宅を訪れるとひどく喜んで、日本人で槍へ登る青年がいたのを意外の事の様に悦んだという。これはわが国の近代登山の幕あけ、スポーツ登山として最初に登った山男で実に記念すべきものであった。この登山を介して岡野、烏水はウォルター・ウエストン師と出会い日本にも山岳会をつくることを勧められる。これが日本山岳会の設立に繋がった。

（話が戻るが……。）ウオォルター・ウエストンの『日本アルプスの登山と探検』を発見した経緯は、岡野金次郎がスタンダード石油会社に勤務していた時、ハッパーと云う支配人がボーイに渡していた一冊の洋書を岡野が手にした。それがウエストンの『日本アルプスの登山と探検』であった。この本が機縁になって烏水、岡野の両氏はウエストンと親交を結び、交友を通して西欧的な登山の啓示を受け、山岳会の設立についての示唆と激励を与えられ設立の機運をつくり、やがて明治38年(1905)10月、同志と共に日本山岳会を誕生させる。「……もしこのとき、岡野がスタンダード石油に勤めておらず、ほかのところにいたなら、あるいはたとえスタンダード石油に勤めていたとしても、ハッパーという支配人がボーイに手渡していた一冊の洋書を岡野が手に取らなかったら、ウエストン師との交流はずっと後になっていたかも知れない。日本山岳会の創立もかなり遅れただろうし、遅れなかったにしても、日本博物学同志会の支部のような形で発足し、英国山岳会などとのつながりは全くないままになっていたかも知れないのである。こう考えてくると、岡野の明治35年夏、槍ヶ岳から下山早々、全く偶然にもウエストン師の著書を手にしたということは、まさに岡野が回顧しているとおり「山の神の手引き」だったのである。さらにウエストンのこの『日本アルプス』を手がかりに、ウエストン師とまっ先に直接会って話し会ったのは烏水ではなく、岡野であることを考えてみれば、彼の果たした役割はすこぶる重大なもので、たとえ七人の創立メンバーの中にはたまたま名をつらねていないとはいえ、彼の名を逸するわけにはいかない。(以下略)」と、元日本山岳会常任評議委員の山崎安治氏が何かの本に書いていたのを見た。……その後、烏水は甲斐駒、常念山脈、白峰三山、悪沢岳、赤石岳、穂高・槍縦走、双六谷溯行など日本アルプス探検時代に数々の輝かしい記録を残したが、大正４年にアメリカに転勤になる。渡米後はレニア峰をはじめ各地に足跡を残す。昭和６年から日本山岳会初代会長を務めた。昭和23年12月23日没。（享年75歳）。また一方の岡野は生涯を通じて満州、朝鮮、樺太、北海道、本州、四国、九州にあまねく足跡をしるしたが、台湾だけは行き損なった。娘さん（二女）が台湾に在住していた時、新高山登山計画を立てたが、日支事変が勃発し娘さんが内地に引き上げてしまったからである。その時64歳だった。1905年に日本山岳会が創立した当時の同志（発起人）は、会員番号順に城　数馬(Jou,kazuma)、小島久太(烏水)(Kojima,kyuta(usui)、高野鷹蔵(Takano,takazou)、高頭仁兵衛（Takato,ihei)、武田久吉(Takeda,hisayoshi)、梅沢親光(Umezawa,chikamitsu)、山川　黙(旧姓河田)(Yamakawa,(Kawada)shizuka)の７名である。岡野金次郎は烏水と徴兵検査で知り合ったのち親交を結び、共に乗鞍岳や槍ヶ岳をはじめ多くの山に足跡を残し著書を通じてウエストンと交友し日本山岳会の創立に尽力した人だが、武田久吉らの日本博物学同志会の面々とは同じ横浜在住の高野を除いてはあまり親しくなく、山岳会との関係も小島烏水を通じてと云うもので、烏水が渡米後は山岳会との関係も薄らぐ様になった。また自分の名前が少しずつ知られる様になり新聞や雑誌の座談会に呼ばれたり宿屋でも名士扱いされる様になった。有名になったり名士扱いされる事を極度に嫌う点からも山岳会から離れて行った。そんな訳で山岳会には入会せず会員番号が付与されなかったものと思われる。日本山岳会は連綿として今日に及びあと２年すると創立110年になる。

（そう云えば親交のある千葉の岡野　修氏(JACNo.9992)は、岡野金次郎氏のお孫さんなんだ！）

湘南平から集合場所になっている大磯町漁港駐車場までは約１時間かかる。さきほど通った浅間山方向へ戻って、鞍部から分岐する道に向かって右に下る。案内板に従って大磯駅方向に下ると、羽白山（坂田山）をひと山越えて高田公園を経て大磯の住宅街に入る。迷路の様な中を通ってＪＲ東海道線をアンダーパスで超え直進すると東海道に至る。この照ヶ崎海岸入口交差点近くに教育家、同志社創設、キリスト主義の教育を創始した新島　襄終焉の地の碑(旅館百足屋跡、徳宮蘇峰筆)がある。信号を渡って右側の歩道脇には「グッバイ、また会わん」と襄が八重に贈った最後の言葉の碑がある。ほかに島崎藤村の旧居など見処が沢山ある。バスの発車は14:30だ！急がなくちゃ！照ヶ崎海岸信号から海岸方向に進む、途中に政友会総裁・首相の原　敬。大正10年(1921)11月４日、東京駅で暗殺された原敬の大磯別荘跡があり横目に見ながら急ぐ。無事間に合った。点呼の後、

私たちは大磯駅から小田原、米原と乗り継いで帰宅した。記念山行には、岐阜支部所属・石川支部会友の広瀬　正氏と石川支部から私１人、太田が参加した。行動中は曇天だったが雨にも遇わず、岡野金次郎の顕彰碑に遇え、日本山岳会創立に貢献した偉大な岳人を知ることが出来たみのり多い快適な山行を楽しむことが出来た。（おわり）。(2013.12.10.記)

（寄稿していただいた、太田先輩には心よりお礼申し上げます。）